

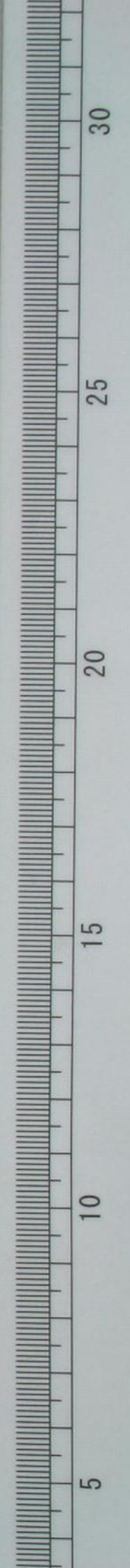


養病後集

十一

昭和十六年七月以降

特別
14
1919
512



○家祖世傳のあはれ公は女工師事せん。家工師を以て長女
の漢性書牘の刻本あり。又大宮侍佛も交りんと覺てく唱ふの語
あり。柏木ぬきも交りあり。とてく是等あり。其の故は予も又
集中あり。お筋冠し。とて武。とて上。回。旅行。とて。是。所。書。を
多し。旅。中。病。を。得。て。死。に。際。し。幸。や。て。金。り。漢。文。の
に。下。り。病。状。を。詳。述。す。おの。印。聖。宮。と。交。り。と。交。り。し。か
おの。用。印。の。二。三。字。を。答。の。刻。し。おの。兄。弟。姉。妹。八。男。五。女。に。別。し
て。集。又。大。概。を。記。す。り。身。の。金。華。白。雲。萬。術。皆。代。は。は。の
鬼。才。也。家。れ。れ。金。華。い。の。り。大。宮。一。り。む。四。指。と。是。す。其。の。其。れ。其
こと。う。り。白。雲。の。書。を。能。く。と。書。す。所。前。の。四。姓。の。家。に。思。ふ。所
れ。最。も。近。あ。り。し。の。家。は。何。れ。か。お。の。身。の。父。書。右。の。丸。と。南。山
寺。と。邪。す。あ。り。記。又。あり。おの。身。四。子。三。男。一。女。今。家。り。の。金。人。家

棟原製

を聞くと此人は家祖を以て早世して其子次郎九郎女は準美とあり
と金人家の二代目とあり。此も又。一。も。次。郎。と。あり。即。ち。何。れ。か。の。こ
おの。身。中。五。十。八。の。命。の。分。を。書。す。題。し。清。若。千。身。此。地。の。市。島。家。を
解。の。花。を。書。す。し。の。所。を。記。す。し。清。若。千。身。の。名。勤。め。即。ち。こ。を。通。り。て。休。憩
所。を。記。す。り。段。畑。の。記。す。り。し。今。の。名。高。り。の。真。打。も。亦。集中
題。吉。田。の。り。の。書。す。別。書。白。紙。四。の。律。詩。あり。成。康。の。戦。乱。を。述。け。れ
る。此。地。に。て。西。浦。原。と。名。し。信。州。の。邊。下。に。在。り。おの。別。業。り。し。こ
の。地。に。て。地。を。知。り。と。湯。り。あり。おの。子。與。く。仲。親。景。茂。り。中。二。子。を。長。女
ふ。切。り。て。産。産。を。病。人。の。死。す。集中。に。家。院。敷。園。の。諷。あり。此。中。系。漢
又。曰。録。く。是。以。九。年。十。一。月。十。日。死。去。と。あり。おの。代。は。何。れ。を。記。す。云。く
世。一。可。以。庭。最。高。也。汝。一。の。以。答。最。後。也。十。室。一。の。以。長。三。子。也。也

第の遺書の家系を記すもの

提言仲氏男

箱十 卷

巻首数頁のみ

此の刻書は正しく依又問の家山程月程村始とある

代官書文集初巻二巻 共十冊 平安公録 瑞言巻二の尾

初巻に東野大武之良の序あり

二巻に乃木自教あり

白雲先生巻法稿本

市島氏碑文

此の碑文は一族の略史を傳輝因事

島徳次郎花柳とある

中庸全篇

公の揮毫は一稿の中庸全文を収め

揮毫は、この本の初稿前白雲翁の家系あり、今余
の贈えたる余の作集中の名あり

肖像画一稿

遺印美干

漢文大段皇氏草堂の文句有稿本

詩帖二

公の市島氏碑文の初稿の序書右三の初時このきたの如く
あり

秀太六歳遊故野野路某處大夫齡可六旬 轄中目之、
問何人子、稱未云、之曰是年此兒名宇吳常、後在武の
其代潤山可毛、今考天惟名懐●忠信、明年就祖宗早殿

程の面目を愛しけりるを慨歎すもあつた後悔するも詮なき事
す所外人は長く日本を住居の牧師として入る、日本の教
育の進歩も日本教士の手裏面を露骨に認められたこと無
九外人の邦語を能くし、用心してそのこと記す

口大隈元が後援する白旗中尉の南極探検の事、島志、改三十一

よるこも、艦の形軍と云き切らず着り、日敵を敗つた、あつた形勢、
ソ艦の世果の、艦をんも、い、や、削、戦、ころ、と、從、來、ソ、の、歴、史、
を、以、治、角、回、の、態、を、ち、り、に、格、を、の、皆、指、を、左、袒、に、起、り、こ、の、端、を
く、運、命、軍、が、起、り、し、り、伊、の、勿、論、が、ロ、ン、ラ、ン、ド、ル、ー、マ、ニ、ヤ、ス、ロ、
ウ、ア、キ、ヤ、西、班、牙、を、以、る、及、ソ、軍、を、起、し、ソ、の、防、衛、の、為、め、キ、
入、り、に、在、る、印、を、運、命、ソ、を、敗、つ、る、軍、と、さ、う、に、化、し、敵、を、い、つ、
有利、に、運、命、つ、る、事、を、以、て、船、向、に、日、海、を、一、と、後、想、を、い、れ、
今、ソ、軍、を、ソ、軍、の、降、服、す、と、云、い、ん、ソ、軍、の、早、く、運、命、を、
後、の、事、を、以、り、船、向、の、ソ、艦、降、服、の、曉、り、帝、政、回、復、を、其、美、國、
の、事、を、以、り、ソ、艦、を、接、つ、る、米、と、英、と、あ、い、も、米、は、接、け、ん、と、
船、降、服、す、と、狗、跡、を、英、國、の、心、の、敗、北、と、作、り、く、お、く
く、自、由、を、以、り、以、後、を、以、り、為、る、の、後、助、を、申、入、れ、り、か、文、際、の、ソ

藤原製

この海

よるこも、艦の形軍と云き切らず着り、日敵を敗つた、あつた形勢、
ソ艦の世果の、艦をんも、い、や、削、戦、ころ、と、從、來、ソ、の、歴、史、
を、以、治、角、回、の、態、を、ち、り、に、格、を、の、皆、指、を、左、袒、に、起、り、こ、の、端、を
く、運、命、軍、が、起、り、し、り、伊、の、勿、論、が、ロ、ン、ラ、ン、ド、ル、ー、マ、ニ、ヤ、ス、ロ、
ウ、ア、キ、ヤ、西、班、牙、を、以、る、及、ソ、軍、を、起、し、ソ、の、防、衛、の、為、め、キ、
入、り、に、在、る、印、を、運、命、ソ、を、敗、つ、る、軍、と、さ、う、に、化、し、敵、を、い、つ、
有利、に、運、命、つ、る、事、を、以、て、船、向、に、日、海、を、一、と、後、想、を、い、れ、
今、ソ、軍、を、ソ、軍、の、降、服、す、と、云、い、ん、ソ、軍、の、早、く、運、命、を、
後、の、事、を、以、り、船、向、の、ソ、艦、降、服、の、曉、り、帝、政、回、復、を、其、美、國、
の、事、を、以、り、ソ、艦、を、接、つ、る、米、と、英、と、あ、い、も、米、は、接、け、ん、と、
船、降、服、す、と、狗、跡、を、英、國、の、心、の、敗、北、と、作、り、く、お、く
く、自、由、を、以、り、以、後、を、以、り、為、る、の、後、助、を、申、入、れ、り、か、文、際、の、ソ

○石之短曰口自燃，百象合能，一多抄，銀子，七，三，三，
失之則貧弱，得之則富強，無異而飛，無足而走，解其穀之類，
開雅能之口，錢之善處前，錢少若君後，
一鬼在野，百人逐之，一金在野，百人競之，况一國之利矣，
世多道，代柱，大念，顛仆，
江河淮海，天之都，市，
私心井中，公心立上，
人更勇，其言也，無言可矣，
人更患在好為人師，
冠冕無魄，士賄賂成知己，
路途知馬力，日久見人心，
言而不行，謂之視面由。

種原製

有漢而不可及，不若卑論有功，
畏友勝於衆師，群游不如獨立，
思得一善，投進，便得得一番氣度，
執迷尋去心，亦去，醒後尋心不單，
長令知米價，老健識山名，
前車之不忘，後車之師也，
池魚不知海，蚯蚓霸一穴，
有言癖而無剪裁，徒非書厨，
東家富財，車馬接踵，西家市德，爪宮滿門，
在心門則不言化利，
山林之中，非有者也，而為道者必入山林，
海崇山爭水，流必得之。

の戦いの戦間、用戦以来十の...
おとす切腹りせき...
立ち、ソを援助の

米、アラスカに ハルコフクを沈 ほろけぬ



氏一アウーフ

【ワシントン廿九日路透電】廿九日米軍消息は米政府は一方ドイツがソ連を援助した場合はソ連軍がアラスカを占領する危険がある

【ワシントン廿九日路透電】廿九日米軍消息は米政府は一方ドイツがソ連を援助した場合はソ連軍がアラスカを占領する危険がある

湖沼地帯の奇襲や 迂回包圍作戦成功

獨、ソ戦の大勢判明

【ベルリン三十日路透電】二十九日はバルト三國からルーマニア國境に至る所、獨逸軍が赤軍の大勢が判明した此の發表は二十七日までの現勢であるが發表された點だけでも判明される如く、獨逸軍の立直りは不可能であらう即ち飛行機は第一線機六千機のうち約七割の四千七百〇七機を失ひ、戦車も第一線機六千台のうち

【ワシントン廿九日路透電】廿九日米軍消息は米政府は一方ドイツがソ連を援助した場合はソ連軍がアラスカを占領する危険がある

ソ聯、國境線を堅持

【モスクワ二十九日路透電】ソ聯消息は、ソ聯軍は獨逸軍の侵入に對して、國境線を堅持してゐる。獨逸軍は獨逸軍の侵入に對して、國境線を堅持してゐる。獨逸軍は獨逸軍の侵入に對して、國境線を堅持してゐる。

【ワシントン廿九日路透電】廿九日米軍消息は米政府は一方ドイツがソ連を援助した場合はソ連軍がアラスカを占領する危険がある

のは二月廿三日、今日、楊遂が崩れ、その六月廿五日、
の夏、(一)き、(二)の也、(三)は楊と和、(四)は楊と和、(五)は楊と和、
(六)は楊と和、(七)は楊と和、(八)は楊と和、(九)は楊と和、
初の佛、(十)は佛、(十一)は佛、(十二)は佛、(十三)は佛、
●と、(十四)は、(十五)は、(十六)は、(十七)は、(十八)は、
て、(十九)は、(二十)は、(二十一)は、(二十二)は、(二十三)は、
十、(二十四)は、(二十五)は、(二十六)は、(二十七)は、(二十八)は、
受、(二十九)は、(三十)は、(三十一)は、(三十二)は、(三十三)は、
術、(三十四)は、(三十五)は、(三十六)は、(三十七)は、(三十八)は、
生、(三十九)は、(四十)は、(四十一)は、(四十二)は、(四十三)は、
有、(四十四)は、(四十五)は、(四十六)は、(四十七)は、(四十八)は、
大、(四十九)は、(五十)は、(五十一)は、(五十二)は、(五十三)は、

藤原製

真に... (一)十月三日記

の江、(二)は、(三)は、(四)は、(五)は、(六)は、(七)は、(八)は、
賜、(九)は、(十)は、(十一)は、(十二)は、(十三)は、(十四)は、
ふ、(十五)は、(十六)は、(十七)は、(十八)は、(十九)は、(二十)は、
三、(二十一)は、(二十二)は、(二十三)は、(二十四)は、(二十五)は、
政、(二十六)は、(二十七)は、(二十八)は、(二十九)は、(三十)は、
エ、(三十一)は、(三十二)は、(三十三)は、(三十四)は、(三十五)は、
と、(三十六)は、(三十七)は、(三十八)は、(三十九)は、(四十)は、
ろ、(四十一)は、(四十二)は、(四十三)は、(四十四)は、(四十五)は、
款、(四十六)は、(四十七)は、(四十八)は、(四十九)は、(五十)は、

の日本、(一)は、(二)は、(三)は、(四)は、(五)は、(六)は、(七)は、
合、(八)は、(九)は、(十)は、(十一)は、(十二)は、(十三)は、(十四)は、
合、(十五)は、(十六)は、(十七)は、(十八)は、(十九)は、(二十)は、
合、(二十一)は、(二十二)は、(二十三)は、(二十四)は、(二十五)は、
合、(二十六)は、(二十七)は、(二十八)は、(二十九)は、(三十)は、
合、(三十一)は、(三十二)は、(三十三)は、(三十四)は、(三十五)は、
合、(三十六)は、(三十七)は、(三十八)は、(三十九)は、(四十)は、
合、(四十一)は、(四十二)は、(四十三)は、(四十四)は、(四十五)は、
合、(四十六)は、(四十七)は、(四十八)は、(四十九)は、(五十)は、



藤原朝

○左の三尊は三聖國傳に大隈元辰在廿中其の
 方々於てありて所のこゝも、もと足利を授けし
 山内宗重の手より傳へ、大隈元辰に授けし
 と是れも、もと傳へた宗重を以て道中に得た
 其のこゝも、もと傳へた

○初めの戦平の、戦戦野原にて、國は、
 軍勢きいあり、初軍、
 先にも野原の如く、心の底に、
 外にも、教の、
 ハ、
 取つて、

山田太夫之地	三崎龜之地	埴原正直	大口彌二
旗田新太郎	江木高遠	江木衷	市橋捨六
徳川頼倫	坂本嘉治馬	徳永重隆	桂五十郎
桂多馬	朝吹英二	朴永春	成瀬仁花
高村元吉	大石正巳	内野正印三	田中一良
入修連吉	肥田里田三郎	早速藤兵衛	古河常三郎

内田五夫	池田龍一	長田文三郎	安田善次郎
京都宮廻	中村進平	竹村良久	久保良香三郎
前田五平	喜田貞吉	梶田半吉	卷菱海
田代亮外	近衛馬麿	鳩山和夫	井上四三
種積陳重	種積八束	馬場憲治	山田毅成
河島醇	野口英世	南野晴磨	谷村一太郎
山山大造	渡村龍六	名積和俊	前原一誠

頼女本姓吉 種村宗八 小久江成之 石里

山色房輔	小山作之地	賀田金三郎	今名山雲
小林文七	桑田豊丸	亀井忠一	石川代松
廣井一	大島信昇三	市村精輔	
梅澤精一	増子正一郎	福原鏡三郎	
赤井雄	澁谷赤城	大野春七郎	
野呂景義	立来欣造	河村清雄	
山田健	山崎俊夫	辻川武進	
原田鏡江	杉山重義	湯原元一	
木崎重吉	横山俊二	山崎直三	
堀 達	高橋泰三郎	黒不家雄	
小林儀三郎	田中次平	角田勤一	
高野仁兵衛	山本和士	鈴木寅彦	
山口正平	山口正平	山崎高義	
山口正平	山口正平	五十嵐正	
山口正平	山口正平	藤田鏡造	

SHK

山田吉之助	三崎龜之助	垣原正直	大口彌二
旗田新太郎	江木高遠	江木重	高橋捨六
徳川頼倫	坂本嘉治馬	徳永重	桂五十郎
桂久馬	朝吹英二	朴永春	成瀬仁花
高村元吉	大石正巳	内見正三	田中一兵
入修連吉	肥田里三郎	早速藤吉	古河常三郎

内田五郎	池田龍一	長田文三郎	安田善次郎
京都官廳	中村進平	竹村良久	久保良吉
前田五平	喜田貞吉	梶田半吉	卷菱海
田代亮外	近衛馬屋	鳩山和夫	井上四郎
種積陳重	種積八束	馬場憲治	山田毅成
河島醇	野口英世	南部晴彦	谷打一太郎
山田大進	渡村貞六	名積和俊	前原一誠

石川千代松 村上専精

種村宗八

小久江成之

石里

野河少将	長谷川善吉	小倉鏡之助	秦	山美
丹後五平	木間新作	赤村善次郎	坂本三郎	
星堂 恒	肥田里三郎	高橋耕雲	香坂新太郎	
村田智治	早川早治	木村糸所	浮本興一	
桐嶋儀一	田口市吉	島田三智	四折冬太郎	
兒島権四郎	金子馬治	玉井文太郎	金井 延	
島村源太郎	犬養 毅	北高治房	吉川善次郎	
小野 梓	寺田望南	島田 翰	桐原捨三	
三浦春作	三浦力太郎	中村正直	土佐通夫	
中津云仲	今久山雲	上野善次郎	村島靖雄	
高橋和三	石浜敏一	土方 守	外山脩造	
石本曉海	神樂江重	守屋北助	岡浦清人	
関根正直	望月軍四郎	田中正造	三所山島彌	
滝澤栄一	久未齊武	久松文雄	秋山儀兵衛	

SHK

山田土左之助	三崎龜之助	垣原正直	大口彌二
旗本新太郎	江本高遠	江本重	高橋捨六
徳川頼倫	板本士嘉治馬	徳永重	桂上十郎
桂重馬	朝吹英二	朴永春	成瀬仁花
高村元吉	大石正巳	内野土中三	田中一兵
入修連吉	肥田重三郎	早速敷三右	古河守之助

俣野時中

内田文久	池田龍一	長田文三郎	安田長九郎
宇都宮忠	中村進午	竹村良久	久須美春三郎
前田玄平	喜田文吉	梶田半古	卷菱海
田代亮外	近衛馬麿	鳩山和夫	井上四郎
種積陳重	種積八束	馬場憲治	山田穀成
河島醇	野口英世	南部蟻磨	谷村一大郎
山田大進	濱村龍二	名越和俊	前原一誠

石川千代村 村上専務

奥平道輔	服部政一	福地源一	重谷有輝
濱田山	蟹井治中	後藤新平	上道守中
知森高吟	枝之右辰	江部源夫	前田慧雲
石井三男	大石理因	淺島梵雲	森田由之
今原雄心	田中義成	永高直八	服部一三
下田新子	水落露石	小沢新三郎	内田信成
稲妻山右衛門	小川滋次郎	河之内重	榊 潔
末松治澄	板垣通昭	久志木梅花	菅原季雄
早部新治	近藤虎五郎	田舎三三	森田思軒
清水晴風	三浦竹久	牧野通次郎	上田宗平
原方中平	今井母久一	田原 榮	芳賀六一
吉田東伍	和田 四郎	坂尾仁介	和田萬吉
小西 徳八	和 維	中川清造	中野武之七

朝本村吉

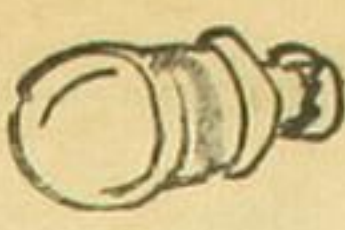
種村宗八

小久江成二

石里 彌太郎

〇二三〇番自合の寝所時廊に大管一戸侍を以て電燈が掛かる
訪ねて来たことと云ふは断りごとく出来ぬ一節は侍も侍る久
方振面合に此漢の例の仕儀は元々移りついでに御座り
大管の口は着連は美言を需むんば女奴卒業して
つれ所は云へん云々風よ愛めんとて思儀も巻取置
きと云ふは是れは色紙の押書と云ふ事(の事)を言ふ
ことには云へんは色紙の押書と云ふは御座り一公体毎に二連
生すの長さは二三年前の早かある此はへ大管の自合の仕儀
織の掛片を贈るは共さす幅三寸許の小けうらゝゝんか箱紙を以て
二儀つれよと云ふは貴く考へんは昨年のハ箱紙を若干贈る
此は儀つれよと云ふは是れは是れが初めとある席上の後中持姫の
古紙が支那の儀つれよと云ふは侍から流るは此の自合の儀つれよ

自合の儀つれよ支那の古紙の中持姫の侍儀と日本に渡りしは冊子を
二種蔵れしことかある是れは四五枚あるの刻本の中持姫の容貌は全
支那美人と云ふは是れ日本の中持姫が支那の美人と云ふは是れ
のと向うく或して我邦の女中が是れを渡りし是れと云ふは
又れと云ふは是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは
比んば多分殆ど概高の仕儀と云ふは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは
の女人は佛の化身と云ふは是れは是れは是れは是れは是れは是れは
日本に生れしは是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは
篇の侍士に就して冬衣と云ふは是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは
法中、支那の御座りしは是れは是れは是れは是れは是れは是れは



この前の時には徐豊之が胃瘵の患者を、薬も余も用ひないで鎮まらせた話から、彼の醫術が近來非常に進んで、「術」から「道」に入りかけてゐる。この分では豊之の醫術は曹華の歳にならないうちに、醫道になるだらうなどと話し合つたのである。

曹華は十歳も年下の右軍を、他人の前では常に「王先生」と呼んで、その書は衛夫人だつて及ぶものでないとしてゐた。彼は外科によい腕をもつてゐたが、性格が仙人じみてゐて、よほどの氣の合つた者が重症でないと思つてもやらないで、半日はかうしてぶらぶら遊んでゐるのであつた。

もう十何年も前のことであるけれど、ある日曹華の家へ屈強な労働者が、頸が外れたといつて飛び込んで来たことがあつた。ついで来た細君の話では暴れ水牛を取頭めようとして格闘してゐて、ガクリと外れたんだといふのである。

『ウンそれはガクリ（頸離）といふ病だ。』
『先生元談ちやありません。山陰中この患者へ行つても直らないんです。早くどうかして下さい。』
『ガクリとやれば治るだらう』
頸を折へて、痛むうちに死んでゐた労働者は、

曹の輕口に憤然として色を變へ、腕をまくつて向つて来た。
その時曹華は素早く卓上にあつた大巻の本をとつて、
『馬鹿ッ！』

と、その男の頸を殿りつけようとした。労働者は只さへ痛い所を殿られてはたまるものではないと、さつと床を蹴つて飛び退いたが、その拍子にガクツと頸ははいつてしまつた。
『どうだガクツと嵌つたらう……』
曹先生は相變らず輕口をいつてゐたといふのである。

右軍はよくこの話をして、曹華の醫は道に入つてゐるといつてゐた。そして自分の書も學から術に、そして道に入らなければ嘘だといつて精進をつゞけて来たのである。
『茶吹は揚技には大した效能はないといふんだがね。徐君にでも頼まれたんかね』
曹華は腰を掛けても長い杖をはなさなかつた。

『いや、この節の徐さんならば、この茶吹を十分きかせると思ふんです。山東から来た人の話では、ある道士がこの茶吹を黒燒にして患者に三日位服ませて、一寸疹のとれた時に指示を與へて巧に煎煎を煎してゐるといふん

です。この一寸自覺症状の變つた時をつかむのは徐さんには何でもない事です。』
『それからが道だね。徐君が訥々として、この茶吹の來歴と、併の殺藥の苦心を患者に説明するだらう。』

『それに徐さんが、これを黒燒にするのに、例の眞崙の土で造つた皿を使ふでせう』
日は大分傾いて、百坪ばかりの畑はもう殆んど家の蔭になつてゐた。畑には鳳仙花や蘇がもう花をもつばかりに伸びてゐた。
『鳳仙花の隣に芽を出してゐるのは何だね』
『白牽牛ですよ。』

『牽牛か……。あれが雷を吹く頃になると鯉が釣れる盛だね』
『この裏のクリークで鯉が釣れますよ』
『僕も昨日歸りがけに一寸やつて見たんだ』
『釣れましたか』
『一つ釣れたね。五寸位のが』
『返したんですか』

『やる子供もあなかつたから、逃しちゃつたんだが、肥えてゐたね』
『僕も今朝行つて二つ釣つて返しといつて來ましたよ。肥えてゐました。』
『鯉には金龜子がいゝといふ事だね。』
『金龜子も揚牛もいゝんですよ。金龜子はま

後：ワ、リ

の今伴の二葉中見あふる、余の室佛、岡山又近きの溪山別溪の
 洞と抱く流石の四の角の處も、今伴の室佛は味もつた、此書印人の
 筆もつた、今伴の室佛は味もつた、此書印人の
 帳目出と余の室佛は味もつた、此書印人の
 社の松下美聲、為る余の室佛は味もつた、此書印人の
 と、今伴の室佛は味もつた、此書印人の
 道少人、秋の動来、余の室佛は味もつた、此書印人の
 や折く人、秋の動来、余の室佛は味もつた、此書印人の
 して示さる、と、今伴の室佛は味もつた、此書印人の

ゆあさんなまきのうらなはさひらく
 かせこをわねゆいともう
 昔の白はま短かしくも、われを、あま短かしくも、

去年はこの杏を大分金
 龜子にやられましたね。
 右軍が自慢にしてゐる杏が、もう緑葉の中
 に粒々な實をつけてゐる。二、八の石几は丁度
 その下にあるのである。
 『まだ色つかないね。』
 『今年は少いです。』
 二人は杏を見上げた。杏が熟すると何時と
 はなしに附近の子供がそれを盗みに来る。盗
 んで行つた跡で、そこらに落ちてゐるのをよ
 く右軍は拾つて食べるのである。
 『杏は子供と金龜子が食べる。金龜子が鯉を
 釣る。釣つた鯉は子供にやる。面白いもんだ
 ね。』曹華は夕空を見上げて獨語のやうに、
 『そして醫家は診察をサボつて患者と遊び、
 書家は揮毫を斷つて藥草に戯る……』
 『藥草栽培は面白いですよ。少くとも字を書
 くよりは樂ですナ。』
 『そして生えたら取り捨てる所なんか書には
 ない面白だらう。』
 『さうですよ。大體種子を播いて御覽なさい
 今朝は生えるか、もう芽を吹くかと、日に何
 度も見に行くのは楽しみなものですよ。』
 『そしてそれが伸びるのも花が咲くのも面白
 だらう。』

だ出ないけれど。……去年はこの杏を大分金龜子にやられましたね。

右軍が自慢にしてゐる杏が、もう緑葉の中に粒々な實をつけてゐる。二、八の石几は丁度その下にあるのである。

『まだ色つかないね。』

『今年は少いです。』

二人は杏を見上げた。杏が熟すると何時とはなしに附近の子供がそれを盗みに来る。盗んで行つた跡で、そこらに落ちてゐるのをよく右軍は拾つて食べるのである。

『杏は子供と金龜子が食べる。金龜子が鯉を釣る。釣つた鯉は子供にやる。面白いもんだね。』

曹華は夕空を見上げて獨語のやうに、『そして醫家は診察をサボつて患者と遊び、書家は揮毫を斷つて藥草に戯る……』

『藥草栽培は面白いですよ。少くとも字を書くよりは樂ですナ。』

『そして生えたら取り捨てる所なんか書にはない面白だらう。』

『さうですよ。大體種子を播いて御覽なさい今朝は生えるか、もう芽を吹くかと、日に何度も見に行くのは楽しみなものですよ。』

『そしてそれが伸びるのも花が咲くのも面白だらう。』

『それがね、伸びる間には倒れたり枯れたり花になるとよい花があつたり、悪い花があつたりする。所が生えるのは、たゞ何にも知らないで、ホツと芽を出しますからね。わだかまりがありませんよ。生えたらもう何時取つて捨てても惜しくはありませんよ。』

『道だね』

『釣れんでも面白い釣といふ所ですナ。』

『徐君はまだ釣れないと面白くないね。』

『術ですナ』

もう邊りには夕闇が迫つて来た。二人は石

几から立つて書齋の方へ歩き出した。

『蘭亭記は書直したかね。』

『駄目です。出来ません。幾ら書直してもうまく行きません。矢張りはじめのが藥草の發芽したやうなもので、後のは伸びたり花が咲くやうなもの、發芽のやうな力がないから、枯れたり萎んだりしますね。まだ道には遠いですよ。』

二人の後から遠寺の鐘の音が聞えて来た。永和九年の五月初めの事である。

書道斷想

鈴木未央

おのれのみ二なき手かきと止りある
 高慢の鼻みぐるしきかも
 焦るなく又弛むなく進まなん

正しき大き道ひとすちに
 このみちに限りはあらじ度みて

日々にあたらたをめぐしてすすめ
 知られずも亦可ならずやいにしへの

(一) 同行の人々に贈る歌
 書道にも新體制の要を説く

その人あはれ口のみにして
 口に説く『君子のわざ』や今いづこ

他人押しのかんたくみのみして
 鼻たかき人のみ多き世なるかな

きのふの弟子は今日の師となる

○七月八日一日家若安熱く好く机邊の詩帳と繕と學と讀及出の
人心の句と録と納法と替り

五斗瓶中身世窄、一燈窓外海山空

溪澗分色烟中樹、近遠爭妍雨後山

花塢淡烟浮榻月、苔磴春水動松風

淺渚潮來船脚踏、平林木落塔燈光

一簇茶烟修竹寺、數聲風笛落梅村

鐘沈林寺暮、燈淡水村寒

花飄曉吹鐘聲遠、柳拂春烟柳絮浮

漸跨雙關千嶺吼、勢堪絕頂萬馬奔

魂清不許雲為伴、肌臆寧知玉有光

山勢盡亦在、山深香亦秋、山空暖亦寒、山深晴亦雨

藤原製

文章不廢山水癖、身心每被溪山縛

看曉山則青且忽而玲瓏山如林也、看晚村則盤鬱村而

雲淡林幽也、山勢致在窺似之間、最為著趣

江碧島逾白、山青花欲燃

一法周旋冰消瓦解、片言挑撥火發烟生

修竹到門雲裏寺、流泉入袖水中人

掃石月盈帚、憶泉花滿鉢

身亂雲埋樹黑、驟雨壓穿峯低

潮到疑吞岸、雲危欲動山

此等の句は画と新きを清くを地へす所、如く是れ、文章の何れに傳ふ所の
以て、
生と山の風臥と味、
又二遊也、
七月八日池

○街録丸の内へと書きよき所刊書を見出しおろけくう漢文
えんは三書二甲十年勤務の地所部の人を書いたもの
去後又信る三書外崩初丸の内上地を踏む今のとき大観
模の信書と一書の中初日事か書かたてありともは女の道一帯
に治大名の居るがころととんと兵部をえりて女の道一帯
麻布も移移も一書と建つてありて一書十書の二書あり
ふふの信書か書かたてありて丸の内上地も一書十書ありて
却ておろけくうの信書か書かたてありて丸の内上地を踏む
よふきくうの信書三書のとき時降つて一書十書ありて
山崎が買つたふふの信書か書かたてありて丸の内上地を踏む
かよりつた人書かたてありて丸の内上地を踏む一書十書あり
けを板と一書と一書ありて丸の内上地を踏む一書十書あり

藤原製

○街録丸の内へと書きよき所刊書を見出しおろけくう漢文
えんは三書二甲十年勤務の地所部の人を書いたもの
去後又信る三書外崩初丸の内上地を踏む今のとき大観
模の信書と一書の中初日事か書かたてありともは女の道一帯
麻布も移移も一書と建つてありて一書十書の二書あり
ふふの信書か書かたてありて丸の内上地も一書十書ありて
却ておろけくうの信書か書かたてありて丸の内上地を踏む
よふきくうの信書三書のとき時降つて一書十書ありて
山崎が買つたふふの信書か書かたてありて丸の内上地を踏む
かよりつた人書かたてありて丸の内上地を踏む一書十書あり
けを板と一書と一書ありて丸の内上地を踏む一書十書あり

藤原製

の、同様に大氏の救済の方々より、
 今頃の如き、天をうらむと
 の御里ある所、此に、
 装束をすま、相の投擲に左の如き、
 献する、
 奉
 一振
 刻銘
 八月吉日
 飛守方賜
 左の如き、
 奉納者
 市島町吉

奉
 一振
 刻銘
 八月吉日
 飛守方賜
 左の如き、
 奉納者
 市島町吉

水原製

水原

水原町は誠に落付きのある上に高雅な気分の際ふ土地である。町の舊家の前を通る時、明治天皇御駐蹕の跡と記された文字には特に目をひかれたが、海軍記念日に招かれて講演を了ると茶話會だと言うて小高い松の茂つた小山に立つてゐる小さい家に連れてゆかれた。そこには織志園といふ標札があつた。丁度城の本丸のやうな形だが聞く處によると、茲が明治初年における越後府の跡であつた。越後府の長官には西園寺公も任せられたけれども此の地に着任はされなかつた。それから、かの有名な前原一誠が此の府の長官をされた。戊辰の役には此の前原一誠は山縣狂介よりは上席であつた。長州人中の傑物で、長岡にも來られたが、主として民政方面を擔當された。此の人は長岡城奪還の爲に河井勢が夜襲した晩には、まだ寝ずにあて、遠くに銃砲聲がきこえると、楮では先刻命令を出した通り、我が軍はもう、今町方面へ進撃をはじめたか、出かした出かした、勝つた、と、宿舍の屋根の上にあがつて、見はましながら小踊りして喜んだ。それ

水原の町一、
 此の如き、
 奉納者

は神田三之町佐藤寛齋さんの家の屋根であつたさうだ。ところが豈圖らんや、長岡勢の逆襲だ、退却々々、早く〜と山縣さんに引下されて、はう〜の體で小千谷へ逃げた、その前原さんが、時代が變ると越後府の最高官として此の水原町に乗り込んだのだから得意思ふべしである。後、越後府が廢止され、水原縣が之に代つてからも縣廳舎は矢張り、この園に置かれたさうである。此水原廳のあつた織志園は、此の附近の豪家市島氏がきりひらかれ、了明了清の二代が、りりて完成したものと、か、當時困窮の年に附近の人々を集めて築山などをこしらへさせたが、目的は民を救ふにあつたから、成るべく町に仕事をさせて手間を取らせたまうである。山の大きさは東西四十七間南北七十五間、高さは僅か十五尺に過ぎないが、それでも茲に登ると蒲原の大平野が見え、近くに聳だつ五頭や飯豊の名山は言ふに及ばず、遠い粟が岳や守門岳なども見えて風光頗る佳麗である。この織志園の由来は早稲田の普宿たる市島春城先生が宗家の爲にものされた立派なものだ、大地主の風格はお殿様には及びもないが、せめてなりたや市島にといふ俚諺にも傳はれる。それから、昔から水原の東南には飄湖があつて、蓬菜の特産は名高いのだが、まはりに櫻を植えて名所となし、飄亭といふ風雅な建物もある。併し今は埋立て、田にする計畫であるとか、これは時局認識の上から洵に快哉事である。

向義久	田中波音	小山松壽	井上辰九
田中稔	田中正平	大浪信幸	酒造三
源田初臣	杉平頼壽	増田真一	山田清徳
真徳中	五原力	西村真治	今津八一
尾代中	順太郎	川上法勤	吉田秀人
會田富原	三宅雅次	真島典二	和田純
三村清三	加只田直	野口多田	手塚弘平
坂口九萬一	熊倉理一	紫安新九	杉木弘
中島九萬	内ヶ崎作三	久吹省三	清橋敬次
河竹繁俊	佐伯仲茂	杉井研治	杉井山夫
木崎三吉	藤田貞	塩沼昌貞	村山駒之助
三木武吉	香取重吉	服部嘉吉	本間久雄
新田忠治	奥田雲龍	佐藤信光	梅瀬洵
高松末峰	山崎元次	岡島其吉	建永勝吾
新村出	今多	杉山金吉	高村真夫

木葵未夫	山岡親五郎	幸田示登	島中雄也
杉平辰四	土谷川福平	幸田成友	原久一郎
相馬昌治	川原一馬	山中樵	母川種郎
三田村玄龍	今津英治	萩原英一	大賀一平
大井貫一	岡崎山也	難波利平	加賀豊三
模忠一	高橋善次	滝部求	後藤朝平
宇尾中	下村山本	林修仁	阪口秋吉
平山登美夫	森脇美和	大江乙亥	中野禮四
里須廣吉	寺尾元彦	生田七郎	原谷三郎
西河大治	山崎恒平	小野安子	真屋弘
佐伯叔作	原田義正	平田徳衛	織田萬
伊豆敏郎	小林存	松村清三	西村文則
神部敏三	市島成一	吉住三三	稀音家淨
安田一	森廣	大橋新太郎	原山吉
姉崎山流	宇垣一成		

水は甚しきよふあり、英米は精々の然開かたり、精かきえに殺せん
 ともよ、粟、防備を狂奔してやふ、精かきえ英の輸送船の些少の
 此手と後め多の心保し、英とてハ、收税を免か、好核分のみく、英
 を後けんとする、米四の回内米の一致を多の、先ん、精の保此の、
 スランドと占領し、アインランドを根拠地を置い、し、わ、まん、
 ず、精かきえと後けんを重慶と彼等の根拠地とする、と、
 今、ん、日本を取て、日後の敵か、分、現、ん、ん、ん、
 重慶を爆撃せん、餘端を造らんと、先、先の大津、
 英米を敵とし、精かきえ、ん、ん、ん、
 米四も精かきえ、ん、ん、ん、
 ハと、ん、ん、先、精の、
 日鼻の、ん、ん、ん、
 七月

藤原製

十三日記

ソ聯軍獨軍の猛撃に スターリン線へ總退却 ミンスクの陥落近し

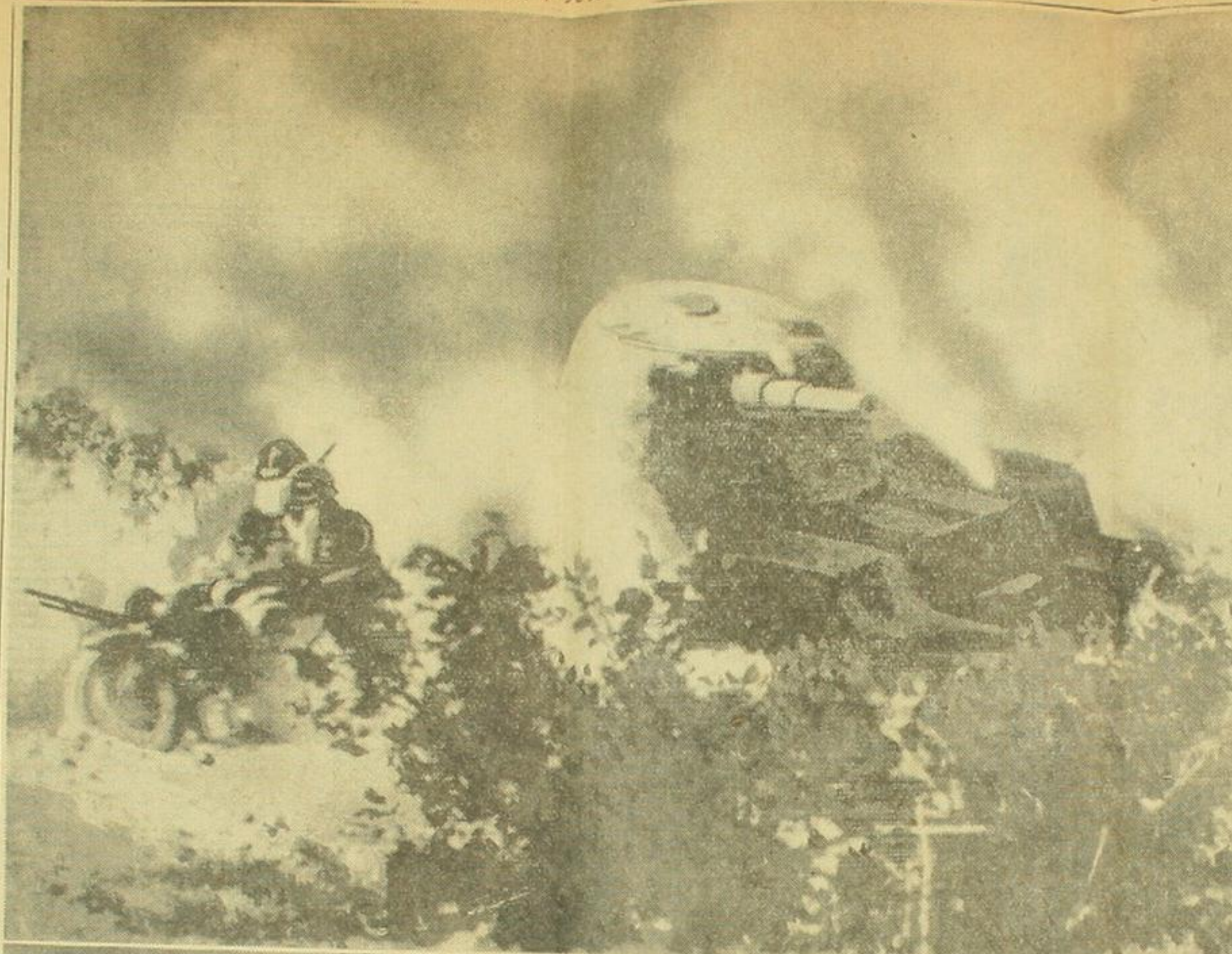
獨軍、大包圍圈完了か 戦車數百を擱坐

ソ聯少數民族兵續々投降

【モスクワ特電廿七日發】廿七日ソ聯軍獨軍の猛撃に、スターリン線はミンスク方面へ激進の獨軍部隊に大進軍を加へた。獨軍は、スターリン線の南に沿つて進軍し、スターリン線は、獨軍の猛撃に、ミンスク方面へ激進の獨軍部隊に大進軍を加へた。獨軍は、スターリン線の南に沿つて進軍し、スターリン線は、獨軍の猛撃に、ミンスク方面へ激進の獨軍部隊に大進軍を加へた。

【モスクワ特電廿七日發】二十七日、獨軍は、スターリン線の南に沿つて進軍し、スターリン線は、獨軍の猛撃に、ミンスク方面へ激進の獨軍部隊に大進軍を加へた。獨軍は、スターリン線の南に沿つて進軍し、スターリン線は、獨軍の猛撃に、ミンスク方面へ激進の獨軍部隊に大進軍を加へた。

【モスクワ特電廿七日發】二十七日、獨軍は、スターリン線の南に沿つて進軍し、スターリン線は、獨軍の猛撃に、ミンスク方面へ激進の獨軍部隊に大進軍を加へた。獨軍は、スターリン線の南に沿つて進軍し、スターリン線は、獨軍の猛撃に、ミンスク方面へ激進の獨軍部隊に大進軍を加へた。



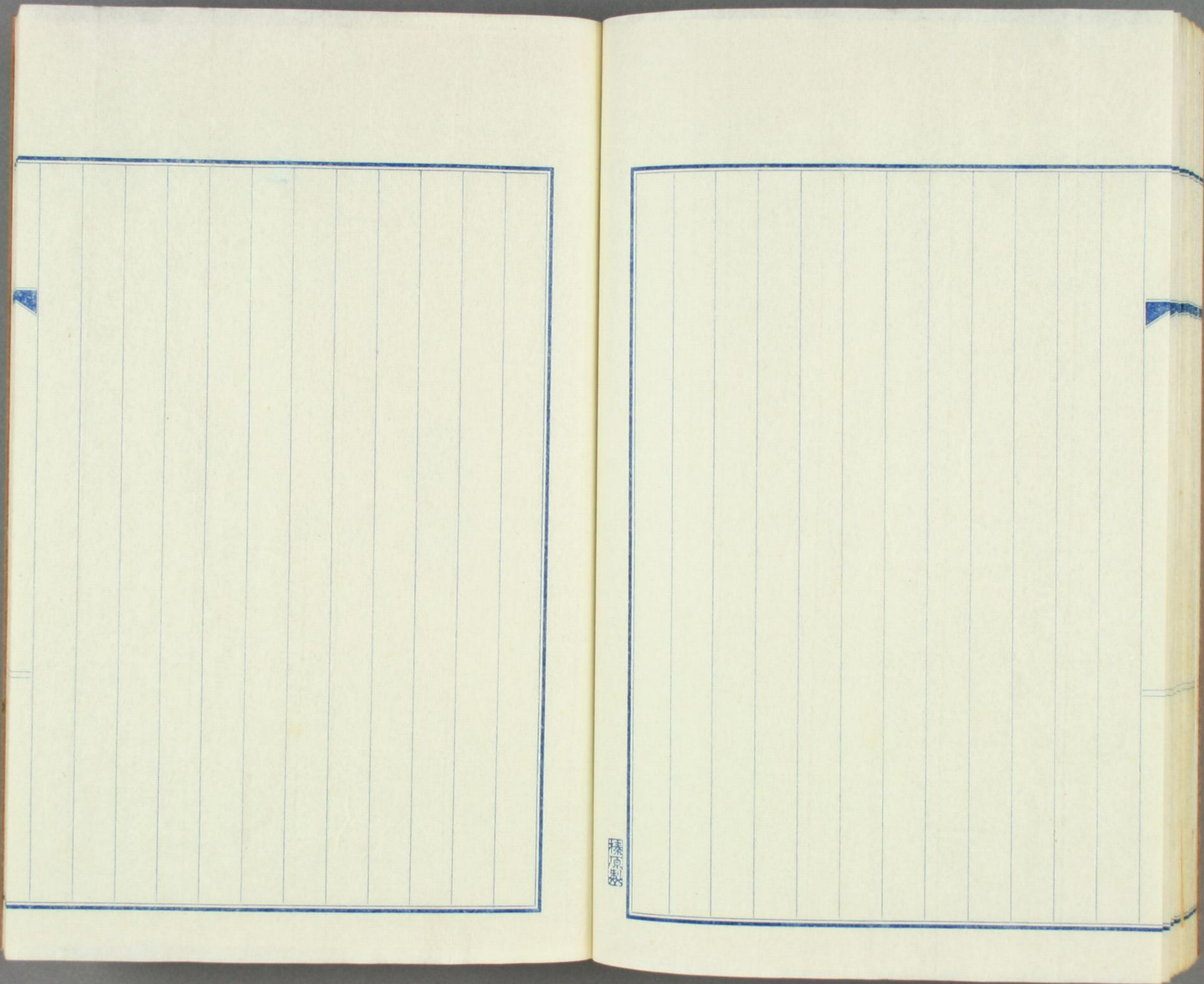
獨軍の猛撃浴び炎上する赤軍戦車

獨制空權を完全確保 ソ聯第一線機過半壊滅

【ヘルリン特電廿七日發】獨軍は、ソ聯第一線機の過半を壊滅し、獨制空權を完全確保した。獨軍は、ソ聯第一線機の過半を壊滅し、獨制空權を完全確保した。

【ヘルリン特電廿七日發】獨軍は、ソ聯第一線機の過半を壊滅し、獨制空權を完全確保した。獨軍は、ソ聯第一線機の過半を壊滅し、獨制空權を完全確保した。

10 15 20 25 30 35 40



東京製

以下
3丁
白紙

醫聖野口英世年表

財團法人 野口英世記念會發行

西暦年	年 號	年 齡	事 蹟
一八七六	明治九年	三歳	十一月九日福島縣耶麻郡翁島村に生まる。幼名を清作と呼ぶ。晩春某日圍爐裏の火中に轉落左手に大火傷す。
一八七八	十一年	五歳	四月三ツ和小學校入學。
一八八三	十六年	八歳	三月尋常科四年卒業、四月温習科に入り生長となる。
一八八八	二十一年	十三歳	三月温習科終了、小林榮氏の懇意により四月猪苗代高等小學校入學。
一八八九	二十二年	十四歳	十月同校職員及び同級生の餽金により若松市會陽醫院渡部鼎氏方にて左手の手術を受く。
一八九二	二十五年	十七歳	三月同校卒業、若松市會陽醫院入門、英語を同市の和田遷吉氏に、獨逸語を佐竹元二氏に學ぶ。
一八九三	二十六年	十八歳	佛蘭西語をフアヅキ、マリオン、テフラタの三氏に學ぶ。
一八九四	二十七年	十九歳	九月上京、十月醫術開業前期試験合格、十一月血脇守之助氏の厚意にて高山齒科醫學院の學僕となる、獨逸語をエリザ・ケッペン夫人に學ぶ。
一八九六	二十九年	二十一歳	五月濟生學舎入學、十月後期試験に合格す、同月高山齒科醫學院講師となる、十一月順天堂病院助手となる。
一八九七	三十年	二十二歳	四月北里傳染病研究所助手を命ぜらる、八月歸省中恩師小林榮氏の命名にて英世と改名す。
一八九八	三十一年	二十三歳	一月「病理學的細菌學的檢査術式綱要」を出版す、四月フレキスナー博士の來朝に當り研究所及東京視察案内の任に當る
一八九九	三十二年	二十四歳	五月海港檢疫官補を命ぜらる、初めてベスト患者を發見す、十月牛莊に赴き國際豫防委員會中央醫院に勤務す。
一九〇〇	三十三年	二十五歳	六月歸朝、九月東京齒科醫學院講師となる、十二月渡米、費府に入る。
一九〇一	三十四年	二十六歳	一月フレキスナー博士の助手となり、蛇毒の研究に従事す、十一月「アカデミー・オブ・サイエンス」に於て蛇毒につき示説を行ふ。
一九〇二	三十五年	二十七歳	六月ウツツホール臨海實驗所に出張研究す、九月歸費、十月ペンシルヴェニア大學病理學助手を命ぜらる。
一九〇三	三十六年	二十八歳	三月カーネギー研究所より蛇毒研究の出版費を提供されることに決定、又ペンシルヴェニア大學上席助手を命ぜらる。
一九〇四	三十七年	二十九歳	十月カーネギー學院研究所助手を命ぜられ丁抹に留學國立血清研究所に入る。
一九〇七	四十年	三十二歳	九月丁抹の留學(師はマドセン博士)を終へ、十月紐育に着す、同月ロツクフェラー醫學研究所一等助手を命ぜらる。
一九〇九	四十二年	三十四歳	六月ペンシルヴェニア大學より「マスター・オブ・サイエンス」の名譽學位を受くロツクフェラー醫學研究所「アツンシエート」に昇進。
一九一〇	四十三年	三十五歳	六月カーネギー學院より「蛇毒及毒蛇」を出版す、「アツンシエートメンバー」に昇進す。
一九一一	四十四年	三十六歳	「微毒の血清診斷」を刊行す、血清學會會頭に就任し大正元年に至る。
一九二一	四十五年	三十七歳	微毒「スピロヘータ」純粹培養に成功す、二月醫學博士の學位を授けらる。
一九二二	大正元年	三十七歳	四月メーリー・ゲーヂス嬢と結婚す。
一九二三	二年	三十八歳	癩痺狂、及び脊髄痙に於て微毒スピロヘータを發見。九月歐米各國に講演旅行に出發、歐洲十一市府の講演を終了、西班牙及び丁抹より勳三等を贈らる、十一月歸米。
一九二四	三年	三十九歳	同月ロツクフェラー醫學研究所のメンバーに昇進す、同月理學博士の學位を授けらる、瑞西より勳三等を贈らる。
一九二五	四年	四十歳	四月帝國學院より恩賜賞を授けらる、九月故國に歸る、勳四等に敘せられ旭日小綬章を授けらる、十一月歸米。
一九二六	五年	四十一歳	「ハーブエー」講座に於て講演す。
一九二七	六年	四十二歳	五月「レプトスピラ」に關する最初の論文發表、大患に罹る
一九二八	七年	四十三歳	六月黃熱病研究の爲南米エクアドルに出張す、十月グアヤキル市に於て謝恩送別會を開かる、同國名譽軍醫監及び陸軍大佐に任ぜらる、グアヤキル及びキト大学名譽教授の稱號を受く、シヤンデーケンに山莊を營む、十一月母シカ歿す。
一九二九	八年	四十四歳	黃熱病原體を發表す、米國醫學會より銀牌を贈らる、十二月黃熱病研究の爲メキシコに出張す。
一九三〇	九年	四十五歳	四月ベルに出張し「ペルー瘧」の研究をなす、リマ大學醫學部名譽教授の稱號を受く、十一月メキシコのユカタンに出張し黃熱病の豫防撲滅に盡力す、ユカタン醫科大學より名譽醫學博士の學位を受く、フライデルフェア市より「シヤン・シカット・メダル」を贈らる、論文百八十六篇に達す。
一九三一	十年	四十六歳	「ブラウン」及び「エール」兩大學より「ドクトル・オブ・サイエンス」の名譽學位を受く。
一九三三	十二年	四十八歳	七月父佐代歿す、帝國學院會員に列せらる、七月ジャマイカに於ける熱帯病會議に列席す。
一九三四	十三年	四十九歳	德國より「レジオン・ド・ヌール」勳章贈與、十一月ブラジ

一八九二	二十五年	十七歳
一八九三	二十六年	十八歳
一八九四	二十七年	十九歳
一八九六	二十九年	二十一歳
一八九七	三十年	二十二歳
一八九八	三十一年	二十三歳
一八九九	三十二年	二十四歳
一九〇〇	三十三年	二十五歳
一九〇一	三十四年	二十六歳
一九〇二	三十五年	二十七歳
一九〇三	三十六年	二十八歳
一九〇四	三十七年	二十九歳
一九〇七	四十年	三十二歳
一九〇九	四十二年	三十四歳
一九一〇	四十三年	三十五歳
一九一一	四十四年	三十六歳
一九一二	四十五年	三十七歳
一九一三	四十六年	三十八歳
一九一四	四十七年	三十九歳
一九一五	四十八年	四十歳
一九一六	四十九年	四十一歳
一九一七	五十年	四十二歳
一九一八	五十一年	四十三歳
一九一九	五十二年	四十四歳
一九二〇	五十三年	四十五歳
一九二一	五十四年	四十六歳
一九二二	五十五年	四十七歳
一九二三	五十六年	四十八歳
一九二四	五十七年	四十九歳
一九二五	五十八年	五十歳
一九二六	五十九年	五十一歳
一九二七	六十年	五十二歳
一九二八	六十一年	五十三歳

校入學。
十月同校職員及び同級生の贈金により若松市會陽醫院渡部鼎氏方にて左手の手術を受く。
三月同校卒業、若松市會陽醫院入門、英語を同市の和田遷吉氏に、獨逸語を佐竹元二氏に學ぶ。
佛蘭西語をフアウキ、マリオン、テフラタの三氏に學ぶ。
九月上京、十月醫術開業前期試験合格、十一月血脇守之助氏の厚意にて高山齒科醫學院の學僕となる、獨逸語をエリザ・ケッペン夫人に學ぶ。
五月濟生學舍入學、十月後期試験に合格す、同月高山齒科醫學院講師となる、十一月順天堂病院助手となる。
四月北里傳染病研究所助手を命ぜらる、八月歸省中恩師小林榮氏の命名にて英世と改名す。
一月「病理學的細菌學的檢究術式綱要」を出版す、四月フレキシナー博士の來朝に當り研究所及東京視察案内の任に當る五月海港檢疫官補を命ぜらる、初めてベスト患者を發見す、十月牛莊に赴き國際豫防委員會中央醫院に勤務す。
六月歸朝、九月東京齒科醫學院講師となる、十二月渡米、費府に入る。
一月フレキシナー博士の助手となり、蛇毒の研究に従事す、十一月「アカデミー・オブ・サイエンス」に於て蛇毒につき示説を行ふ。
六月ウツツホール臨海實驗所に出張研究す、九月歸費、十月ペンシルヴェニア大學病理學助手を命ぜらる。
三月カーネギー研究所より蛇毒研究の出版費を提供されることに決定、又ペンシルヴェニア大學上席助手を命ぜらる。
十月カーネギー學院研究所助手を命ぜられ了抹に留學國立血清研究所に入る。
九月了抹の留學(師はマドセン博士)を終へ、十月紐育に着す、同月ロックフェラー醫學研究所一等助手を命ぜらる。
六月ペンシルヴェニア大學より「マスター・オブ・サイエンス」の名譽學位を受くロックフェラー醫學研究所「アツツシエート」に昇進。
六月カーネギー學院より「蛇毒及毒蛇」を出版す、「アツツシエート」に昇進す。
「微毒の血清診斷」を刊行す、血清學會頭に就任し大正元年に至る。
微毒「スピロヘータ」純粹培養に成功す、二月醫學博士の學位を授けらる。
四月メーリー・ゲーヂス嬢と結婚す。
癩痺狂、及び脊髄癱に於て微毒スピロヘータを發見。九月歐米各國に講演旅行に出發、歐洲十一市府の講演を終了、西班牙及び了抹より勳三等を贈らる、十一月歸米。
同月ロックフェラー醫學研究所のメンバーに昇進す、同月理學博士の學位を授けらる、瑞西より勳三等を贈らる。
四月帝國學士院より恩賜賞を授けらる、九月故國に歸る、勳四等に敘せられ旭日小綬章を授けらる、十一月歸米。
「ハーブエー」講座に於て講演す。
五月「レプトスピラ」に關する最初の論文發表、大患に罹る六月黃熱病研究の爲南米エクアドルに出張す、十月グアヤキル市に於て謝恩送別會を開かる、同國名譽軍醫監及び陸軍大佐に任ぜらる、グアヤキル及びキトー大學名譽教授の稱號を受く、シヤンデークンに山莊を營む、十一月母シカ歿す。
黃熱病原體を發表す、米國醫學會より銀牌を贈らる、十二月黃熱病研究の爲メキシコに出張す。
四月ベルに出張し「ペルー疣」の研究をなす、リマ大學醫學部名譽教授の稱號を受く、十一月メキシコのユカタンに出張し黃熱病の豫防撲滅に盡力す、ユカタン醫科大學より名譽醫學博士の學位を受く、フイラデルフィア市より「シヤン・シカット・メダル」を贈らる、論文百八十六篇に達す。
「ブラウン」及び「エール」兩大學より「ドクトル・オブ・サイエンス」の名譽學位を受く。
七月父佐代助歿す、帝國學士院會員に列せらる、七月ジャマイカに於ける熱帯病會議に列席す。
佛國より「レジオン・ド・ノール」勳章贈與、十一月ブラジルに出張し黃熱病の研究に當る。
「ノーベル」賞牌を受く、巴里大學より「ドクトル」の名譽學位を受く。
オロヤ熱病原體を發表す。
「トラホーム」病原體を發表す、十月アフリカに遠征す。
五月二十一日アフリカの英領アクラに於て黃熱病研究中之に感染して殉職す。勳二等に敘せられ旭日重光章を授けらる、佛國より防疫功勞金牌を贈らる。

◇記念館並生家所在地
福島縣耶麻郡翁島村三城湯(猪苗代驛より一里五丁、翁島驛より三十丁)
年中無休開館 遺品數百點陳列

と驚かす。戦果であらうか、
せずして起る万歳の聲に目を
の首はゆるがばかり重なる
んばかりに歌呼をあげる人、
人の眼はたゞ苦悶し續けた
への眼の涙が光るのみ
さうして記者もまた眼に
と胸先をすくひしがしばし
あ、と胸先をすくひしがしばし

怒る大和権の投票

【久留米通信】大和権の水防から部
部を離る河川監督官、内務省
水防課長は十日午前十時から
縣立第一高等女学校で、行は
協理長岡初太郎氏、内務省成
田土木局長、高野副局長、
鈴木東京土木出張所長以下関係
一府六縣の土木関係官および警
防員ら七百余名が出席する中
に、東京土木出張所長から選
拔された河川監督官の河川工費二
十名は水防長本城技師の指揮に
より「水位七メートル帯部厄
るが、家庭生活の内面は大し
た変化をみてゐない、あらゆる
食糧問題は一年前から巧みに

科学する心を講演

科学動員協會、東京市教育局共
主催の科学講演會は、十日午後
時半から日比谷公會堂で開會
する心」と題して権田文相、
日の校會問題」と題して科学動
に感した「事實は水防演習」

文化生活の面

をのぞい
てみるに、暇時にもかかはらず
藤原製

天井板・床柱

建築用材はなんでも篠田へ!! (カクロー流通)
内政 篠田政之助
問屋 木野
東京市京橋區町二丁目二四四・二五三六

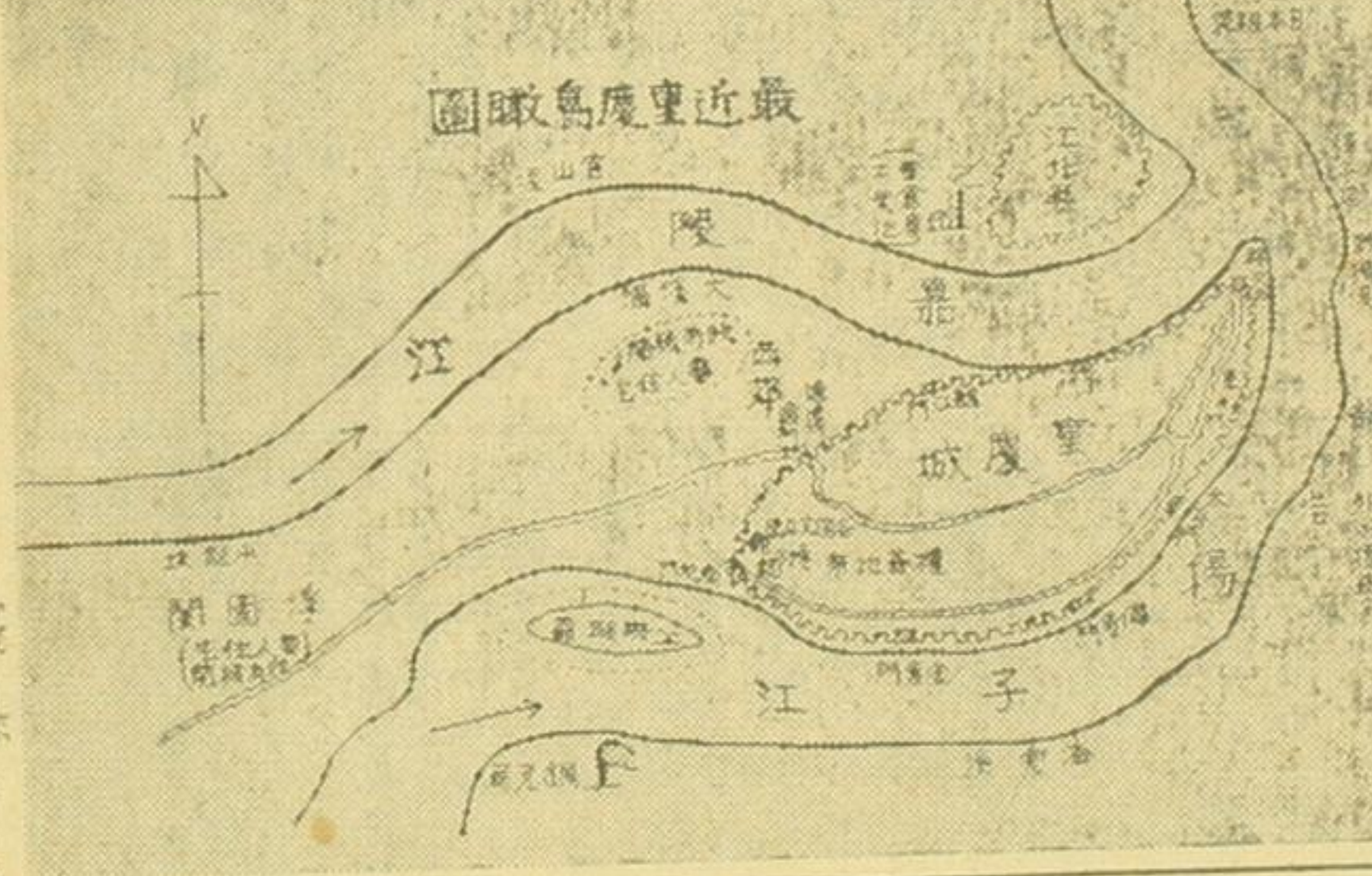
芳澤代表 日入浴した日
御慶参拜 印賣商の帝國全
種芳澤吉吉大使は三好領事とも
なひ九日朝霧山御座に晴明奉告の
参拜をなしたのち午前九時三十二
分奈良電報山麓で伊勢へ回つた

相 伏 阿鼻叫喚

【東京通信】大和権の水防から部
部を離る河川監督官、内務省
水防課長は十日午前十時から
縣立第一高等女学校で、行は
協理長岡初太郎氏、内務省成
田土木局長、高野副局長、
鈴木東京土木出張所長以下関係
一府六縣の土木関係官および警
防員ら七百余名が出席する中
に、東京土木出張所長から選
拔された河川監督官の河川工費二
十名は水防長本城技師の指揮に
より「水位七メートル帯部厄
るが、家庭生活の内面は大し
た変化をみてゐない、あらゆる
食糧問題は一年前から巧みに

重慶政權の變り方

【重慶通信】重慶政權の變り方
は尋常ではない、その苦悶
の極は、いよいよ露骨となりつゝあるのである。今年の重慶政權
の變り方は、大体六十億元とみられてゐるが、その九割強を赤子公債そ
の他で補填せねばならぬといふ状態になつたのである。この公債は
また市場で消化されず、政府系四銀行に引受けさせるので財政イン
フレに拍車をかけて重慶経済を断末魔に陥れつつある。そして我
が対重慶の強化は必然的に物資の不足を來し物資は絶人的昂貴を蒙
けてゐる。事變前を二〇〇とすれば今日の重慶の平均物價指數は昨
年五月の二四〇から、本年春には一、五〇〇、六月には遂に二、〇
〇〇となり、七月に入つてさらに暴騰を續け、接收すべからざる状



際立ち至つた、そして米不足は本年に入り救済大問題となり、納
税を米とする物納制度をつくり、米の需給に悩まされてゐる。また軍
需工業部門では輸血路はビルマルト一本となつてしまつたし、資
材の入手難で生産能力は廠廠の一途にあり、各廠區に對し極端その
他の節約命令を出されはならなくなつた
かくて重慶経済は今や断末魔の余喘に苦しんでゐるのだ、アメリ
カの重慶合作は冒険行はれてゐない、アメリカとしては支那
のタンクステン、鋼、アンチモニー、桐油、畜産品などが極めて
必要なのである、すべての借款、その他飛行機、軍需品などの供
給はその見返りに過ぎないのである、重慶はアメリカのこの時要
により、貿易委員を動員してそれらアメリカの要求品の増産を

蔣等郊外へ逃避

【香港九日路透電】重慶來電によ
れば七・七日を以て遂行され
た我が海軍航空隊の重慶襲撃は
折衷中央黨部で大規模の聯合記念
演習の真意で午前九時といふ
に巨も第一回目の空襲襲撃が第
せられたため同記念演習中の襲
政軍界の諸人達は蔣介石、孔祥
熙以下、いづれも自動車をつつて一
目散に郊外の安全地帯に逃避した
【このためこの日の呼び物となつて
ゐた國民兵團の結成式の外、慶定
されてゐた市中の諸行事は大半取
り止めとなつたといはれる、なほ
空襲に際しては市の西郊に向つて
避難が集中せられたため同地區
に散在する黨政軍機六處所その
他軍事関係施設十五處所に命中、
火災を記し多大の損害があつた様
である。

我が猛爆に諸行事取止

【香港九日路透電】重慶來電によ
れば七・七日を以て遂行され
た我が海軍航空隊の重慶襲撃は
折衷中央黨部で大規模の聯合記念
演習の真意で午前九時といふ
に巨も第一回目の空襲襲撃が第
せられたため同記念演習中の襲
政軍界の諸人達は蔣介石、孔祥
熙以下、いづれも自動車をつつて一
目散に郊外の安全地帯に逃避した
【このためこの日の呼び物となつて
ゐた國民兵團の結成式の外、慶定
されてゐた市中の諸行事は大半取
り止めとなつたといはれる、なほ
空襲に際しては市の西郊に向つて
避難が集中せられたため同地區
に散在する黨政軍機六處所その
他軍事関係施設十五處所に命中、
火災を記し多大の損害があつた様
である。



ヒットラーとナポレオン と統總一ラトツヒ 術戦のソレポナ

上 友社社本
平 彌 場 大



奇縁、進入の時期

ヒットラー総統は六月廿二日をもちて蘇ソ作戦の火蓋を切った。数日間のドイツ軍は決河怒濤の進軍を開始したのに對し、ソ軍また攻守逆く転じ、戦線一千六百キロにわたる東歐の天地は瞬間雷雨と化し、俄に南欧ポーランドにおいて四千人の戦車入り込んで相撃つといふ人傑削つて以来の戦争をしてゐるのであるが、交戦十日、ドイツ軍の戦線は所在の戦を散らされ、戦攻不濟、死の淵とまでいはれるスターリン要塞線を突破し、今ではモスクワに迫り、一路モスクワ街道を前進するとさへ傳へられる。

この戦道にして信ずべきものであるとしたら、われわれは今朝ながら蘇の如きドイツ軍の攻撃力と戦術の如き蘇軍の戦術を考へ得ないものであるが、そのヒットラー作戦の起る日時が六月廿二日のに對し、今を距る約百廿年前の二八二二年、かの総世の英傑ナポ

相通ふ兩雄の心眼

兵學界の謎 奈翁の敗退

レオン一世が、モスクワ進軍のた

戦術と作戦指導の容れならざるを

ち據るなど、墨海、エーゲ海を

として西方に向ふべき戦線を百八

轟動するスペインを奪うべきは

秘海軍を確保し得ず、これを討へ



でエジプト及びシリア運使に、次

つて相見をなすやうになつたばかり

八千頭の馬を牽へたのをはじめと

ここに幾多の謎と解り切れない

近眼治る

専賣特
學理上
作ら自毛

ヒットラーの百廿年の答案

このやうに、ナポレオンのモス

か、二百五十里といふ遠大の行程

を備へた代り兵隊と立脚

友社社本

東條はドイツ軍の攻撃、その第一つより一九一七年の早春ロシアの国内は革命運動の烽火が勢よくあがつてゐた。この新戦場に提起されるのは前大戦の獨逸戦争であり、戦中、中につつと一九一七年十一月の革命による講和條約の成立である。この革命は獨逸の最大ヒットであり、東部戰線の獨逸軍を西部戰線へ大移動させるため、カイゼル皇帝の命令で獨逸政府とその陸軍總司令部とレーニンによつて打たれた大芝居だったのである。武力戰の間に、この大芝居は餘りに興味か深い。

獨逸は一層混亂に陥つてしまつた。けれども、ケレンスキーは獨逸を屈服させるまで戦手を離すべきことを叫んで、獨逸に軍隊を立て直しをやつた。そして南前戰線では奥太

さにとりかかれてゐた。露國戰線から軍隊を持つて行かぬはならぬ、その爲に對露戰爭を速かに終結させねばならない。そこで當時が用ゐられる事となつた。ケレンスキーに追

レーニン初め同志ルナチャルスキー、ジノヴィエフ、モロトフ、ラデツク及びリトヴィノフ等二八九名を乗せて、これをドイツ兵が護衛し露國境から東部の露土へ侵入せしめた。この列車は「封印列車」として有名なものである。一九一七年四月十六日獨逸と中立國の瑞南の國境で、密掛けを遂行した列車を仕立、多くの軍資金も與へ、

獨逸兩國の奇縁 前大戦の大芝居

利軍を一時押し破つて反撃に出た。

カイゼル皇帝はこの露軍立ち直りを愛護した。獨逸政府と陸軍總司令部は西部戰線の重大

獨逸の兵士には獨逸に銃を捨てて露土へ歸れと宣傳した。一方、獨逸は兵隊を放つて露土の陣地に同じ様な宣傳ビラを巧みに撒布した。

レーニン等のこの運動はドイツ軍の支持で成功し、兵舎が生れ、兵卒委員制度が組織され、司令官もレーニンの指揮へ入つた。ケレンスキーの失敗、レーニンのプロレタリア政治革命前進、十一月六日レーニンのベテルブルグ占領、ここにソヴィエト政府は誕生した。レーニンは直ちに獨

逸と「ブレスト・リトヴィスク」媾和條約を結んだ。ブレスト・リトヴィスクは今回の獨逸開戦で開戦の翌日六月二十三日早くも獨逸によつて占領されたワルソー東方百八十キロの地點、まさに歴史は變るの感が深い。とにかく、レーニンは獨逸によつて今のソ

聯を建設し、現在のスターリン・ソ聯が獨逸の攻撃を受けてゐる事は獨逸兩國の奇縁奇縁を物語するものであらう。

△ △ △

